

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02116

研究課題名(和文) 西洋古代哲学におけるスケプシス(skepsis)の展開 考察から懐疑へ

研究課題名(英文) Skepsis in Ancient Greek Philosophy: From Consideration to Doubt

研究代表者

金山 弥平(Kanayama, Yasuhira)

名古屋大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：00192542

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：プラトンの探求精神はソクラテスに遡り、アカデメイアにおいて懐疑主義に繋がる。その過程を(1)『パイドン』のソクラテスの最後の言葉に認められるソクラテスからプラトンへの探求(哲学)の継承、(2)プラトンが用いた蠟の書き板が探求の道具としてもった有用性、(3)『饗宴』に見られる探求者同士の恋(愛、エロース)が共同探求を推進する働き、(4)『ティマイオス』の自然学探求がプラトン哲学全体においてもつ意味、(5)ギリシアの「探求(スケプシス)」と中国の「道」の概念をめぐり、探求を基礎とするギリシアの懐疑の積極的意味と中国の懐疑の否定性の論点に集中して研究を行ない、それぞれの論点について成果を出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「研究成果の概要」で挙げた(1)～(5)のそれぞれにつき、新解釈を提出、また将来の研究の基礎となりうる成果を上げた。(1)刑死を前にしたソクラテスの最後の言葉の新解釈を、孔子とその弟子との関係も考慮に入れて提示、(2)文字の発明と蠟の書き板の利用を軸にして『テアイテトス』における記憶モデルについても新解釈を提出、(3)プラトンが示す恋愛観が利己的なものとする多くの解釈を批判し、親子の愛も考慮に入れ、哲学的愛に関わるプラトンの思想を析出、(4)『ティマイオス』の色彩論に関する新解釈を提出するとともに、新たな翻訳を作成、(5)懐疑を焦点しつつ、中国思想とギリシア思想の根本的な相違を示した。

研究成果の概要(英文)：Plato's inquiry comes from that of Socrates and leads to the skepticism of later Academy. The target of my research was this process, in dealing with which I focused mainly on (1) the succession of inquiry (i.e., philosophy) from Socrates to Plato, which can be recognized in Socrates' last words in the Phaedo, (2) the help Plato obtained from the use of the wax tablet, which was his main tool for inquiry, (3) the role of "eros (love)" Plato recognized in the Symposium as the dynamic power that promotes the inquiry by lovers, (4) the significance that inquiry into the physical world in the Timaeus had for the entire Platonic philosophy, (5) positive value of doubt Greek philosophers saw in doubt and its negativity attributed in Chinese philosophy, in the wide framework of Greek Skepsis and Chinese Way (道). And in each topic I could produce good results, like international publications and translation.

研究分野：古代ギリシア哲学

キーワード：探求 懐疑 プラトン ソクラテス 文字 『パイドン』 『饗宴』 『ティマイオス』

1. 研究開始当初の背景

「考察」を原義とする「スケプシス」は、「知 (sophia) の希求 (philo-)」を意味する「哲学」の核心をなす概念である。古代の哲学者は、知の獲得が「善き生 = 幸福」に導くとしてスケプシスを行ったが、ヘレニズム期になると、スケプティコス(懐疑主義者)が、知の達成なしでも動揺を免れる善き生は確保されるという新たな立場を示した。しかし、神の知と人間の認識を峻別する古代哲学全般の枠組の中では、「知」よりもそこへの道筋、すなわちスケプシスに価値を置くのは自然でもあり、懐疑主義はその徹底であったとも言える。本研究では、ソクラテス、プラトン、ヘレニズム哲学、そしてそれ以降の古代哲学史を、この重要概念「スケプシス」を軸に捉え直し、「考察」が善き生に対してもつ意味と、そこに望見される知の構造を解明することを目指した。

遡れば、本研究のスタートは、申請者が 1983 年から 1985 年にかけて G.E.R. Lloyd 教授、及び M.F. Burnyeat 教授の指導の下に行ったケンブリッジ大学でのプラトン『テアイテトス』研究に存する。知識の定義を求める対話篇『テアイテトス』の探求は失敗に終わるが、第 1 部の「知識 = 感覚」説の吟味では、感覚成立のメカニズム、相対主義、流転主義、第 2 部の「知識 = 真なる判断」説の吟味では、虚偽の判断の可能性、後代のタブラ・ラサの原型とも言える「蠟の塊」、及び「鳥舎」の記憶モデル、第 3 部の「知識 = 真なる判断 + ロゴス」説の吟味では、認識対象の単一性・複合性とロゴスの関係、等々の認識論的に極めて重要な問題が取り上げられ、示唆に富んだ議論が展開される。『テアイテトス』は、西洋哲学における認識論の最重要のテクストの一つであって、それが後の哲学に与えた影響は非常に大きい。申請者のケンブリッジでの研究は、第 1 部の感覚論について、Oxford Studies in Ancient Philosophy (1987)掲載の論文 'Perceiving, Considering, and Attaining Being (Theaetetus 184-6)' に結実したが、しかし第 2 部と第 3 部については、申請者はその後、ほぼ 20 年にわたり、プラトンの議論の解明の糸口がつかめないままだった。

この糸口を明確に捉えることができたのは、2015 年 3 月京都大学で開催された国際学会 A New Perspective on Plato and his Philosophical Methods の keynote speaker として準備した招待講演 (Plato's Pursuit of Roads) を通してである。この研究を通して申請者は、『メノン』の「知らないものは探求できない」というパラドクス以降、プラトンが知識探求において重要視したのは、知識の対象それ自体よりも、そこに通じる様々な道筋であるという知見を得るに至った。狩猟術の非常に発達した古代ギリシアという環境において、プラトンは、動物の残した足跡を追っていく道の探求と関連づけて哲学の探求・考察を捉えているとする解釈は、これまで誰も注目しなかった新たな視点であり、それがプラトン解釈全体に及ぼす波及効果は大きい。知の対象に至る道は一つではなく、そこには多数の道がありうる。この着眼は、プラトン『パイドン』の仮設法を取り上げた論文 'The Methodology of the Second Voyage' (Oxford Studies in Ancient Philosophy, XVIII, 2000, pp.41-100)にもすでに認められ、また 'Plato as a Wayfinder: To Know Meno, the Robbery Case and the Road to Larissa' Japan Studies in Classical Antiquity (JASCA) 1, 2011.3, 63-88, 'Taxonomy of Plato's Wayfinding Enquiry', HERSETEC, 4, 1, 2010, 1-21 においても、プラトンの知識観を認知地図的認識論として捉える新解釈として提示していた。しかし、「道によって繋がれる都市」に譬えうる個々の知の対象と、「繋ぐ道」、すなわち認識対象相互の関係性のうちで、彼が重視したのは前者より後者であるとする解釈がもつ可能性を、その時点では明確に意識していなかった。だがこの視点からプラトン哲学を見直すとき、彼の探求方法の「想起 仮設法 分割・総合」という流れも、「探求対象の直線的狩猟・考察 俯瞰的にすべての道を包囲しつつす狩猟・考察」という流れの中に新たに位置づけることができるし、また彼が『ソピステス』においてイデア結合の考えを大々的に示すことも容易に理解できる。さらには、skepsis が、後に懐疑主義となっても、それが幸福に向けて肯定的意味を持ちうることも理解できるようになる。本研究は、このような構想のもとに開始されたのである。

2. 研究の目的

知の対象それ自体よりむしろ考察を重視する立場から、プラトンの認識論をネットワーク的に理解する、そしてその観点で、プラトン哲学に関わる種々の問題の解決に通じる、また幸福を目指す古代懐疑主義のプログラムとも一致する、ということを示すべく、次の諸論点について自身の独自の解釈を提示する。

(1) G. Vlastos の解釈に顕著であるが、ソクラテスとプラトンは、前者はアポリアー(行き詰まり)に導く論駁的哲学、後者はイデア論、想起、仮設法など、積極的理論の哲学として対照的に解釈される傾向がある。しかし、知の対象よりもむしろ道筋の考察を重視するものとしてプラトン哲学を解するとき、行き詰まりに陥ることは種々の道のマッピングを可能にする行為として積極的意味をもち、ソクラテスとプラトンを連続的・総合的に捉えることができるようになる。

(2) ソクラテスとプラトンの連続性については、『パイドン』におけるソクラテスの最後の言葉に込められた深い意味を、種々の証拠を提示して、析出する。

(3) 『テアイテトス』第2部の虚偽不可能のパラドクス、「蠟の塊」および「鳥舎」の記憶モデルの失敗、第3部の「知識=真なる判断+ロゴス」説の棄却も、すべて知の対象をいわば点的に捉えるところから来ていると解釈しうる。この点については、プラトンが『ピレボス』で示す記憶モデル(書記と挿絵画家のモデル)がプラトンの最終モデルであるとして、この記憶モデルを、ギリシアにおける文字の発明と、プラトンが用いた蠟の書き板と関係づけ、新たな解釈を提示する。

(4) 知の対象への到達よりもむしろ考察そのものを重視する立場は、知に到達することによって善き生(=幸福)を達成することはできなくても、知に向かう考察それ自体に、善き生の本質を認める立場に通じうる。古代の「スケプティシズム」(懷疑主義)は「スケプシス」の「考察」という点に着目して、「考察主義」とも訳しうる立場であった。この点は、ギリシア哲学における探求の精神という、より広い観点から、中国思想の伝統と比較するかたちで、示すことができる。これによって、アカデメイアがスケプシス(懷疑)に転換した理由のより良き理解を得ることができるであろう。

3. 研究の方法

研究方法は、プラトン、アリストテレス、ヘレニズム哲学関係の著作、二次文献を正確に読み進めていく古典研究の正統的方法である。

具体的手順としては、ライフワーク的なプラトン研究書(Plato on the Road of Enquiry)を完成させる。そのための方策として、当初研究計画に掲げたのが次の項目であった。しかし、当然ながら、本研究の遂行にあたって、いくつか細かいところでの修正をせざるをえなかった。当初の方策を記すとともに、修正した点も合わせて示す。

(1) プラトン『プロタゴラス』翻訳。これについては、他の翻訳候補にこれを譲ることになり、その代わりに、『ティマイオス』の翻訳に携わった。本翻訳はほとんど完成しており、年内の出版を目指している。

(2) 医学者ガレノスの哲学的著作翻訳。これは、『ティマイオス』という、『プロタゴラス』以上の大作に従事することになったため、翻訳完成にまでは至らなかった。しかし、『ティマイオス』における生理学の展開は、ガレノス翻訳の準備作業ともなるものであった。

(3) スケプシスという広い観点からの古代懷疑主義研究を進める。

(4) 親しい交わりを得ている国際的な研究者達と密に連絡をとり、意見交換、及び海外での研究成果発表を積極的に行う。それゆえ原著翻訳は日本語であるが、論文等は基本的に英語で執筆する。これについては、「4. 研究成果」で示すとおり、概ね順調に推移したと言える。

(5) そしてまた、最初に挙げたプラトン研究書(Plato on the Road of Enquiry)の出版については、『ティマイオス』の翻訳を上梓したのち、本申請研究での諸成果をまとめるかたちで、原稿完成に向かうことができる。

4. 研究成果

まず実質的な研究として記しておきたいのは、近刊となる著作、論文のことである。第一に、近日中に出版社に送る予定のプラトン『ティマイオス』の翻訳がある。『ティマイオス』の翻訳を通して、プラトンの探求(スケプシス)が、最終的に『ティマイオス』の自然学に行きつくようなものであったこと、そして彼の関心が初期の段階から、善がこの世界にどのように実現されているか、という自然学的なものであったこと、プラトンのアイデアは、この世の秩序の根拠として仮設されているものであることを、新たに確認できた。この知見は、翻訳の解説に掲載予定である。

もう少し具体的に述べると、‘Socrates’ Humaneness: What Socrates’ Last Words Meant’, *Frontiers of Philosophy in China*, 2019, 14 (1)で論じたところであるが、プラトンの探求は、彼が愛したソクラテスの遺志を受け継ぐものであると同時に、ソクラテスの生死が無駄にならない世界観を打ち立てるところにあった。それが一方では、魂の不死証明や、魂三区説に繋がるし、他方では、『パイドン』の善原因説、『国家』の太陽の比喻、善を頂点とするイデア界の措定、そして『国家』の国家論に繋がっていく。『ティマイオス』ではそれらの問題が集約的に扱われる。国家論としてはアトランティス伝説の枠組みがまずある。また、「ソクラテスの生死が無駄にならない世界観」と関連しては、イデア界の秩序とこの世界の関係をプラトンは、『パイドン』、『国家』、『テアイテトス』などを通して考察していき、最終的に『ティマイオス』において、デーミウールゴスの宇宙創造、そのなかで抵抗する力として働く必然性、コーラーの想定、また種々の感覚の有り方、生理学、病理学と関係させて、エイコース・ロゴスとして展開していくのである。

また、プラトンの経験論的探求と関連して、Plato on Colours in the *Timaeus* という題名の論文を、チリの Professor Marcelo D. Boeri に、6月初めには送る予定である。これは、スペイン語に訳されて、Boeri et al. 編のプラトン『ティマイオス』に関する論文集に掲載予定である。この論文は、『テアイテトス』で展開された感覚論を、具体的にこの世界の人体の構造に落とし込んで展開するそのあり方を、色彩論を中心に据えて論じるものである。

さらに、プラトンの共同探求と関連して、論文 “Being Together and Going Together:

Plato 's Symposium and Protagoras” を Jorge Mittelmann 編の Festschrift for Prof. M.D. Boeri (Springer) のために、すでに送っており、近日刊行の予定である。この論文では、プラトンの探求が共同探求であり、それがプラトンがソクラテスの足跡をたどっていく彼の基本的な哲学探求、ソクラテスの生死に触発された哲学探求に遡るものであることが明確に示されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Y.Y. Kanayama	4. 巻
2. 論文標題 What the Use of Writing Tools Brought about in Ancient Greece: Plato's Mind-Models and the Alexandrian Library	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Suto, Y. (ed.), Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World	6. 最初と最後の頁 55-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金山弥平	4. 巻 50
2. 論文標題 共にあること、共に進むこと プラトン『饗宴』と『プロタゴラス』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中部哲学会年報	6. 最初と最後の頁 45-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金山弥平	4. 巻 特別号
2. 論文標題 古代ギリシアの医学哲学 『古い医術について』とプラトンのhypothesisの方法 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アリーナ	6. 最初と最後の頁 161-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金山弥平	4. 巻 3
2. 論文標題 コラム2 懐疑主義の伝統と継承	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界哲学史3 中世I 超越と普遍に向けてー	6. 最初と最後の頁 100-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金山弥平	4. 巻 69
2. 論文標題 ヘレニズム時代の哲学(1) 幸福とは何か	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 点から線へ	6. 最初と最後の頁 60-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金山弥平	4. 巻
2. 論文標題 Skepsis and Doubt: Ancient Greece and the East	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Karyn Lai, Rick Benitez, Hyun Jin Kim (Eds.), Cultivating a Good Life in Early Chinese and Ancient Greek Philosophy: Perspectives and Reverberations, Bloomsbury	6. 最初と最後の頁 85-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金山弥平	4. 巻 61 (3)
2. 論文標題 ソクラテスからヘレニズム哲学にいたる「よく生きるための知」 道田論文と梶見論文と伊藤論文へのコメント	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 285-300
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金山弥平	4. 巻 2
2. 論文標題 Love and Procreation in Plato 's Symposium 206b-207a	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Journal of Humanities, Nagoya University	6. 最初と最後の頁 187-203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金山弥平	4. 巻 14 (1)
2. 論文標題 Socrates' Humaneness: What Socrates' Last Words Meant	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Frontiers of Philosophy in China	6. 最初と最後の頁 111-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3868/s030-008-019-0007-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuhira Y. Kanayama	4. 巻
2. 論文標題 Plato's Wax Tablet	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 M.D. Boeri et al. (eds.), Soul and Mind in Greek Thought. Psychological Issues in Plato and Aristotle	6. 最初と最後の頁 81-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-3-319-78547-9_5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Marcelo D. Boeri and Yasuhira Y. Kanayama	4. 巻
2. 論文標題 General Introduction	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 M.D. Boeri et al. (eds.), Soul and Mind in Greek Thought. Psychological Issues in Plato and Aristotle	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-3-319-78547-9_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Yasuhira Y. Kanayama	4. 巻 1
2. 論文標題 Plato's Dream	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 147-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuhira Y. Kanayama	4. 巻 15
2. 論文標題 Plato on Activity and Passivity of Perception	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 哲学フォーラム (名古屋大学哲学研究室)	6. 最初と最後の頁 60-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金山 弥平	4. 巻 35
2. 論文標題 Recollecting, Retelling and Melete in Plato's Symposium. A New Reading of he synousia tokos estin (206C5-6)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 International Plato Studies	6. 最初と最後の頁 249-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金山 弥平	4. 巻
2. 論文標題 Socrates' Last Words	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 XI Symposium Platonicum; Plato's Phaedo. Papers, International Plato Society/Annablume Classica, San Paulo	6. 最初と最後の頁 440-450
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金山 弥平	4. 巻 37 (2)
2. 論文標題 プラトンの探求とイデア界の地勢	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 臨床精神病理	6. 最初と最後の頁 119-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金山 弥平	4. 巻 13
2. 論文標題 Approach to Time in Ancient Greek Philosophy	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of the School of Letters, Nagoya University	6. 最初と最後の頁 11-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金山 弥平	4. 巻 1
2. 論文標題 The Birth of Philosophy as 哲学 (Tetsugaku) in Japan	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Tetsugaku	6. 最初と最後の頁 169-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計10件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 Y.Y. Kanayama
2. 発表標題 Being Together and Going Together: Plato ' s Symposium and Protagoras
3. 学会等名 Virtudes y vicios eticos politicos y epistemicos. Un estudio historico sistematico del caracter bidimensional de la virtud y el vicio y su aplicacion a la democracia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金山弥平
2. 発表標題 時間、表象、記憶 アリストテレス時間論とプラトンの記憶モデル
3. 学会等名 中部哲学会、シンポジウム「時間と記憶」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金山弥平
2. 発表標題 Socrates' Humaneness: What His Last Words Meant
3. 学会等名 6th Nagoya Meta-Philosophy Workshop (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金山弥平
2. 発表標題 プラトンが想起で意味したもの
3. 学会等名 中国人民大学招待講演 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金山弥平
2. 発表標題 Plato's Wax Tablet
3. 学会等名 北京大学招待講演 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金山弥平
2. 発表標題 Socrates' Humaneness: What his Last Words Meant
3. 学会等名 Comparing Virtues, Roles, Duties in early China and Graeco-Roman antiquity, Symposium 中国人民大学 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金山 弥平
2. 発表標題 What the Use of Writing Tablets Brought about in Greece: Ancient Models of Mind and Memory
3. 学会等名 The Fourth Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World: Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World 名古屋大学 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金山 弥平
2. 発表標題 古代ギリシャの医学哲学
3. 学会等名 中部大学国際会議「新しい科学の考え方をもとめて 東アジア科学文化の未来」(招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金山 弥平
2. 発表標題 Socrates' Last Words
3. 学会等名 International Plato Society (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 金山 弥平
2. 発表標題 古代ギリシアにおける右回り 時計回り、反時計回り？
3. 学会等名 シンポジウム「人間と記憶」(基盤研究(B)) (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 監修：金山弥平、金山万里子、一ノ瀬正樹、伊勢田哲治	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ニュートンプレス	5. 総ページ数 144
3. 書名 Newton 別冊 哲学	

1. 著者名 M.D. Boeri, Y.Y. Kanayama, J. Mittelmann, B. Botter, T.C. Brickhouse, N.D. Smith, M. Kanayama, I. De los Rios, I. Costa, G. Rossi, J. Echenique, M. Correia	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 259
3. 書名 Soul and Mind in Greek Thought. Psychological Issues in Plato and Aristotle	

1. 著者名 金山弥平、一ノ瀬正樹、伊勢田哲治	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ニュートンプレス	5. 総ページ数 208
3. 書名 哲学大図鑑	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------